

これから の時代を 生き抜く力を 育む



学習塾 affetti 代表
孕石 修也

はじめに

愛媛大学在学中に起業すると決意して、早一年の月日が経った。最初の半年は師のもとで民間学童保育の経営を経験し、今年の四月から学習塾アフエッティを開業した。たった一年だが、私の意識は大きく変わった。ここでは4つのことを皆さんにお伝えし、萱町商店街に佇む「学習塾アフエッティ」を知っていただきたい。



萱町商店街の真ん中にあります。

自分の為に生きる

「誰かの為に生きる」「誰かの役に立ちたい」「誰か…だれか…ダレカ…」私は、一年前までその得体のしれない「ダレカ」の為に生きることこそが立派な人間だと信じていた。学校で刷り込まれてきたこの言葉は、あまりにしつこく付きまとい「ダレカ」を求めるのだだっ広い世界は、窮屈で仕方がなかった。だから同じように迷子になっ

ている生徒には「自分の為に生きなさい」と言っている。

自分の為に生きていけば、成長した時に「ダレカ」ではない「アナタ」と巡り合える。極論を言えば、髪を染めて登校しようが、スカートが短かろうが、自分の為にした行為ならば大目に見てあげればよい。ベルトコンベアの作業員のように型にはまらぬモノを不良品だと捨ててしまう社会は、いかにもだだっ広い世界ではないか。最初からそんな世界に野放しにするより、少しずつ少しずつ自分を大きくしてほしい。そんな自分を大切に出来る人間が、いつか「自分の為に生きることが、誰か（社会）の役に立っている」から。

夢を持つということ

当塾では、夢を抱くことに重きを置いている。そういうと「夢じゃ飯は食っていけない

い」とか「夢をみたら成績が上がるのか」と、批判を食らったこともある。だからこの場を借りて、私なりに夢を抱く意義を語りたい。私はよく二種類の戦士に例えている。過去と戦う戦士と現実と戦う戦士だ。どちらが良いとか悪いとかいうつもりはない。しかし、私は現実と戦って欲しいと常に願う。先ほどの批判を述べる方々の常套句は「私は現実を見ている」だ。現実を見ていると現実と戦っているのは、イコールでは結ばれない。なぜなら自分の能力を過去からしか判断できない人は過去と戦うことしかできないからだ。

理解を深めてもらうために、とある高校生の例をあげようと思う。大学受験を控えたその子は、模試の結果に合わせて常に志望大学を変えていた。センター試験本番も変わらなかつた。結果自分の偏差値にあった大学を受験し、最終的には最後の最後まで挑戦し続けた人間と順位が入れ替わ



り落ちてしまった。

よくある話と思いますが、これかもしれないが、これが私の大学受験だった。だからこそ、夢を持つ大切さを知っている。夢を持つと、自分の能力を未来形で考えられるようになる。ありたい自分がいるからこそ、現実と戦う覚悟ができる。そして何より、夢を持つことは自分自身を必要とする唯一の手段である。

最近どうやら若者の自殺が増加傾向にあるらしい。原因の多くは、「誰からも必要とされていない気がする」とだ。夢を持つのも、叶えるのも、託すのも自分にしかならないものだ。せめて自分だけでも、自身を必要としたならばそんな淋しい理由で命を絶つことを選ばなかつたであろう。

しかし夢を持つと簡単には言うが、そんな簡単に手に入るものではない。考えて、考えて、考え抜く。大事な人は人が人たらしめる手段を用いて生きることだ。

学習塾アフエツナイとは..

私は「勉強しなさい」と命令口調で言ったことは過去一度もない。理由は一つ、お互いにとってストレスでしかない言葉だからだ。多くの家庭や学校で飛び交うこの言葉を、大人たちは念仏のように唱え続けている。



努力の価値を学ぶ場でありたい

る。御利益があれば少しはよいのだが、唱え続け崩壊した家庭は数知れない。だから私は学習への動機づけを非常に大切にしている。その基盤に「夢を持つこと」「自分の為に生きること」などがある。

教育の基本は二対一であるという認識の下、彼らにあつた質問を日々投げかけている。生徒には、夢が見えてくるセルフクエスチョンシートや価値観を育成するためのプログラムを用意している。あとは、一緒に計画しルールを作り、実行する。そして補助輪が外れるまで、考えて、行動に移すという基本的なサイクルを繰り返す。

私もまだまだ未熟者ゆえ模索しているが、有意義で充実した人生を送るため、彼らとともに幸せでいること、これだけは腹を括って生きている。

私が萱町商店街に居続ける理由

正直に言えば、最初は、萱町商店街は「このままで良い」と時代に足並みを揃える努力



勉強する場所は、机の上とは限らない

力を行わない商店が多いし、シャッターが閉じて行くのを、どこか大型店舗のせいにしていく気さえしていた。

しかし、私は商店街がなくなっても良いとは思っていない。なぜなら大型店舗が地域の顔役にはなりえないからである。もちろん画一的な世界を望むなら問題ないのだが、ずっと同じ世界を走り続けるランニングマシンのような街並みはおもしろくないだろう。

そして今は何より、この萱町商店街に愛着がある。商店街の一角にある錆かけのシャッターは一年前、商店街復興という大義名分よりも、私の夢の一つが叶う「ドキドキ」とか「ワクワク」とかそんな幼稚な言葉が似合う感情と共に、時代に逆らい押し上げられた。しかしそれから一年も経つと、朝になると響き渡るシャッターの「ガラガラ」と風になびく万国旗の「はたはた」が、どうも体に馴染んでくる。

愛着を感じてしまった今、私は商店街のシャッターを少しずつ開けていこうと思っっている。その過程で、萱町商店街の魂を受け継いでいきたい。ここが再び地域の顔役として松山の振興に貢献していく、これが私の次のステップである。



毎日が運動会のように賑わう商店街